

第143回簿記検定試験

1級 出題の意図

[商業簿記]

(出題の意図)

1級商業簿記において学習すべき事項を網羅的に出題しました。

問題の形式の面でも、決算整理前残高試算表に対して、適切な決算整理手続を施して、財務諸表を作成する基本的な問題です。

決算整理前残高試算表の空欄補充問題では、実質的には前期末の勘定残高を問うています。減価償却やリースの処理に代表されるように、複数年度にまたがって組織的に行われる会計処理を正確に理解しているか確認しています。

決算整理事項は、棚卸資産の評価、貸倒れの見積り、退職給付引当金の設定、その他有価証券の評価、リース資産を含めた固定資産の減価償却、新株予約権付社債の償却原価法の適用、税効果会計の適用などが含まれています。処理すべき項目の数は多いですが、それぞれの処理はシンプルな形で出題しました。

なお、代理店販売の会計処理については純額の手数料のみ計上する点に、税効果会計の適用については資産負債法を採用している点に、それぞれ留意して解答する必要があります。

包括利益計算書、キャッシュ・フロー計算書および株主資本等変動計算書における金額は、断片的に問う形式とはなっていますが、損益計算書を中心にそれぞれの財務諸表がどのように連携しているかについて理解の程度を確認する趣旨で出題しました。

[会計学]

(出題の意図)

第1問は、会計学における基本的な概念や処理方法についての知識を問う設問です。これまでに何度か出題実績のある領域と新しい領域とを織り交ぜて出題しました。いずれも専門用語を問う設問ですので、的確に理解して正確に解答する必要があります。

第2問は、のれんを含む在外子会社の外貨表示貸借対照表の換算と連結手続きについて問う設問です。在外子会社の資産と負債、のれんとのれん償却額、純資産などの換算が的確に理解できているかどうかを解答するうえでポイントとなります。また、のれんを在外子会社の修正仕訳で計上する方法によった場合、在外子会社の為替換算調整勘定にはのれんの換算によって発生した分も含まれています。この部分についてはすべて親会社の持分に帰属するため、非支配株主持分への振替は行わない点にも注意する必要があります。

第3問は、工事契約について工事進行基準を適用した場合の工事請負業者が認識する工事収益および工事原価の会計処理について問う設問です。工事進行基準を適用するためには、工事収益総額、工事原価総額および決算日における工事進捗度が信頼性をもって見積もることができるのが前提条件ですが、これらの見積りが変更されたときには、その見積りの変更が行われた期に影響額を損益として処理しなければなりません。この点の理解度を問うことに主眼を置きました。

【工業簿記】

(出題の意図)

第1問は単純総合原価計算の問題です。問題文の説明で、新製品Xの製造・販売に関して、先入先出法、非度外視法、製造間接費の正常(予定)配賦、月次決算の処理などが把握できたかどうかを問うています。販売量が減少するような状況でも、生産量のある程度保ち、在庫量が増加するような場合には、月次決算における営業利益は必ずしも減少しない(むしろ増加する)というストーリーの出題でした。問1から問5までは、着実に計算すれば回答できる基本問題ですが、問6は問題文全体を分析する能力および工業簿記・原価計算理論の理解度を問うことも意図しました。

第2問は原価差異の会計処理に関する問題です。『原価計算基準』の四七(一)に相当する部分の要約です。

【原価計算】

(出題の意図)

品質原価計算と差額原価収益分析からの出題でした。

品質原価は予防原価、評価原価、失敗原価(内部失敗原価と外部失敗原価)に分けられます。それぞれの原価はどのような内容か、またどのような原価がそれに該当するかについての理解度を問1で問いました。

問2は差額原価収益分析の問題であり、現状案をベース・ケースとして、2つの品質プログラム案それぞれについて、何が差額原価および差額収益となるかを理解したうえで計算できるか、またどちらの案が有利なのか判断できるかを問う問題でした。